

ナビゲーション地図としての江戸切絵図のデザイン再考

政策・メディア研究科 XD 石川初研究室 修士課程1年 吉田桃子

1、研究目的と背景

私たちは地図に囲まれている。スマートフォンなどでつねに現在地とオンラインの地図を参照できるようになった現在、私たちは地図を通して街や地域を眺めているとすら言えるだろう。若林幹夫は『地図の想像力』(2009)の中で、「地図とは人間による世界と社会の空間的なあり方に関する解説と制作に関わるテキストであり、そのようなテキストを媒介とする社会的な諸実践の痕跡なのだ」と述べている。地図は単に世界を縮小したものではなく、地図を制作する社会の価値観が反映されたものである。ゆえに、地図のデザインを通して地図制作者が世界をどのように眺め、事実として理解しているかという思想や思惑を読み解くことができる。そこで私は世界のような地図の図法を用いて、その地図が描かれた場所とは異なる地域や時代を対象地として描き直し、そこから都市を新しい読解の視点の獲得を試みる。地図を通して、それまでとは異なる視点や世界観で都市を考察し、その研究手法の獲得や考察を行いたい。地図という媒体が今私たちが生きている都市や世界をどのように捉え直して批評し表現できる可能性を有しているのかを模索する。

その試みの一つとして、私はこれまで江戸切絵図(図1)という江戸時代に庶民の間で人気を博した地図のデザインを用いて現代都市の地図制作を行ってきた。江戸切絵図は、1755年に吉文字屋によって製作が始められたもので、江戸の都市部の案内図として約30の地区が描かれ、江戸土産としても販売され人気を得ていた。いくつかの版元があったが、尾張屋のものがよく知られている。その独特の絵柄から、古地図のコレクションの対象として人気のある地図である。この地図の図法を用いて現代都市の地図を製作することは、江戸時代の人の特徴である「移動は歩行しかなく、江戸の街は歩行の場であった」という制限された見方、ルールの中で都市を描くこ



図1『東都青山絵図』(1853年発行 現青山・渋谷付近)(出展:国立国会図書館

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286667?tocOpen=1>)

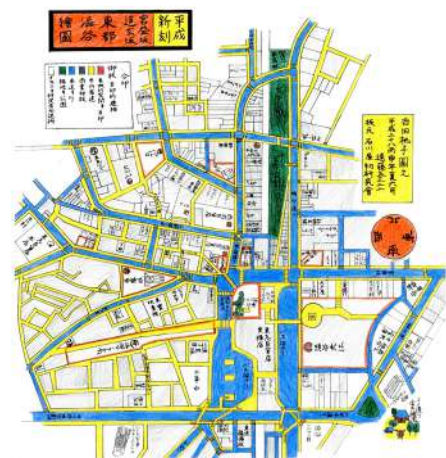


図2『東都澁谷繪圖』(2016年筆者作成)

とに他ならない。そのことで歩行者の観点から都市空間を描き直すことができ、当たり前には眺めている地図や都市を批評的に捉え直すことができる。実際に渋谷を対象地として描いた現代の江戸切絵図として『東都澁谷繪圖』がある。

2、成果報告

今年度は2回のワークショップと、ヴェネチアでの切絵図の製作を行った。

2-1 お台場ワークショップ

2017年10月14日に国土交通省主催の地理情報系シンポジウム「G空間EXPO」で江戸切絵図を用いたワークショップを行った。内容は、予め用意した江戸切絵図の地図記号のパーツを参加者に配り、それを使って空想のお台場の地図を製作するというものである(図3)。参加者は江戸切絵図の地図記号から現代の都市を表現して地図を作成しようとするが、江戸切絵図の地図記号には現代の都市の要素をそのまま記述できるパーツがない。例えば、ショッピングモールを地図記号で表現しようとしても、江戸時代にはショッピングモールはないために、直接使える地図記号のパーツが無い。そこで、参加者は例えば町家のパーツや大名屋敷のパーツと言った江戸時代にあった都市の要素の地図記号で代用して地図に表現してしまう。このワークショップでは、地図記号から現実空間を創造するために「見立て」を行わなくてはならない。つまり、本来地図制作で経る過程である「現実空間を記号化する過程」に対して、このワークショップでは「地図記号から想像する現実空間」を表現する試行を行なった。今後このワークショップのまとめとして、参加者25人が作り出した地図を考察し、何の記号を何に見立てたかを分析していきたい。



図3 お台場ワークショップの参加者によって作成されたお台場切絵図

2-2 品川ワークショップ

2017年10月27日に品川女子学院の中学1年生、2年生の生徒さんの希望者合計11人と北品川をフィールドワークし、その後江戸切絵図の図式を用いて北品川の地図制作を行った(図4)。ワークショップの時間の都合上、参加者が地図を描いたことで発見したり、生まれた北品川という都市への考察を記録し記述することができなかった。そのため収集した作品の写真から、参加者がどのように都市を描いたか考察を行う。また、今回得たワークショップの技法を、今後より正確なデータを取るためのワークショップを行う際に生かしていきたい。



図4 品川ワークショップの参加者によって作成されたお台場切絵図

2-3 ヴェネチア切絵図

江戸切絵図という地図は江戸時代に庶民の間で使われたナビゲーション地図である。そこで、江戸切絵図が使用されていた江戸時代と同じく掘割を交通機関として持ち、現在もその機能を使って生活を続けている街での現代の江戸切絵図の制作を試みた。対象地にはイタリアの水都、ヴェネチアを選んだ。2017年11月22日から2017年12月8日までヴェネチアに滞在し、地図の制作を行なった。ヴェネチアは古くから現代に至るまで主要な交通システムが運河にあり、街の中での交通手段はゴンドラや水上バス、歩行に限られる。ヴェネチアと同様に江戸はかつて運河の都市であり、ヴェネチアでの都市体験を現代の江戸切絵図として描くことで、江戸切絵図のデザイン手法を理解できると考えた。対象地であるヴェネチアでは水上バスを利用する等、運河都市を体感する移動を心がけたフィールドワークを行った。

実際に『白爾尼繪圖』を製作し、以下の考察・知見を得た。まずヴェネチア切絵図の作成において、これまで描いた東都澁谷繪圖で行ったような現実空間を地図記号で「見立て」る必要がなかった。なぜなら、ヴェネチアと江戸のような近世以前の都市同士は街を構成する要素が似ており、例えば寺社仏閣は教会、お屋敷は宮殿など、地図記号を読み換えることなく地図に起こすことができた。そのことで白爾尼繪圖という地図自体からの発見が少なく、期待通りの発見がある地図とはいかなかった。現在の白爾尼繪圖は、建物や通りの名前など地図に描ききれていない部分も多いので、より細かに地図を描き、さらに考察をおこなっていきたい。加えて、ヴェネチアも現代以前の古い地図が多く残されているので、それらの地図の図式で東京を描くと言った、これまでの江戸切絵図のデザイン制作と逆の作業工程を行うことでさら

なる発見を目指したい。



図5『水都白蘭尼繪圖』（2017年筆者作成）

3、発表論文・講演等

2017年5月21日に行われた2017年度日本生活学会全国大会にて「ナビゲーション地図としての江戸切絵図のデザイン再考」と題して口頭発表を行った。また2017年8月9日と10日に行われた日本地図学会では、本研究の口頭発表だけでなく、地図・図書展に『東都澁谷繪圖』を出展し優秀地図賞に選出された。本研究は今後、2018年7月に日本地図学会の査読論考の提出を予定している。

4、今後の展望

これまでは江戸切絵図を通して研究を進めてきたが、今後は様々な地図の図式で都市を描くことで都市の読解を進めていきたい。より多くの地図を描き、数を増やす必要がある。また今後、今回得たワークショップの手法を改善し生かすことで、より実測的な調査・分析を進めたい。2018年7月には日本地図学会の査読論考の提出を控えている。そのためこれまで行ってきた江戸切絵図の分析自体も分析や制作活動を進め、ナビゲーション地図としての機能性の高さや地図を通した都市の考察を進めて行く。

—参考文献

- (1) 清水英範・布施孝志『再現 江戸の景観—広重・北斎に描かれた江戸、描かれなかった江戸』鹿島出版会、2009
- (2) 『古地図 読み方・楽しみ方』、安藤優一郎監修、「江戸楽」編集部、メイツ出版株式会社、2013
- (3) 『新版 大江戸今昔マップ』、かみゆ歴史編集部、中経出版、2014
- (4) 俵元昭『江戸の地図屋さん;販売競争の舞台裏』、吉川弘文館、2003
- (5) 『広辞苑 第六版』、新村出編、岩波書房、2008
- (6) 若林幹夫『増補 地図の想像力』、河出文庫、河出書房新社、2009
- (7) 石川初『ランドスケール・ブッカー—地上へのまなざし』、LIXIL 出版、2012
- (8) 陣内秀信『イタリア都市再生の論理』、鹿島出版会、1978
- (9) 陣内秀信『迷宮都市ヴェネチアを歩く』、角川書店、2004
- (10) アン・ルーニー『地図の物語 人類は地図で何を伝えようとしてきたのか』高作自子訳、日経ナショナルジオグラフィック社、2016
- (11) 陣内秀信『東京の空間人類学』、ちくま学芸文庫、1992